

令和3年度 特別の教育課程の実施状況等について

栃木県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
足利市立桜小学校	足利市教育委員会	公立

1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表	学校関係者評価結果の公表
足利市立桜小学校	https://www.city.ashikaga.tochigi.jp/soshiki/a95/	https://www.city.ashikaga.tochigi.jp/soshiki/a95/

2. 特別の教育課程の内容

(1) 特別の教育課程の概要

本市全小学校において、平成15年度より取り組んできた英会話学習の内容と外国語活動・外国語科の内容を関連づけた独自の年間指導計画を作成し、「話すこと」「聞くこと」に特化した指導を行うことで、英語によるコミュニケーション能力の育成を図る。

必要となる教育課程の基準の特例については、「【教育課程特例校】特別の教育課程の実施状況等について（足利市）」を参照。

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ⊙計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
- ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ⊙実施している
- ・実施していない

(3) 自校における評価

- ・第1学年からの英会話学習の実施が、英語によるコミュニケーションの基礎的な能力の育成につながっているか。

毎年年度初めには、前学年からの積み重ねを感じられる。聞く力は話す・読む・書く力の基礎となるものなので低学年のうちから英会話を実施することは基礎的な能力の育成につながっていると思われる。もう少し回数が増えると更に良いかとも思う。

- ・第1学年からの英会話学習の実施は、英語に慣れ親しむことにつながっているか。

ネイティブの先生の英語に触れたり関わったりすることや、授業の始めに行うあいさつの積み重ねで基本的な英語での対応ができあがり、英会話に対する抵抗感がなく、楽しみながら学習に取り組んでいる。ゲームや歌、いろいろなジェスチャーを取り入れながらの授業なので1年生も英会話の学習をととても楽しみにしており、慣れ親しむことにつながっている。

- ・第1学年からの英会話学習の実施によって、外国語や外国の文化に対する興味・関心が高まっているか。

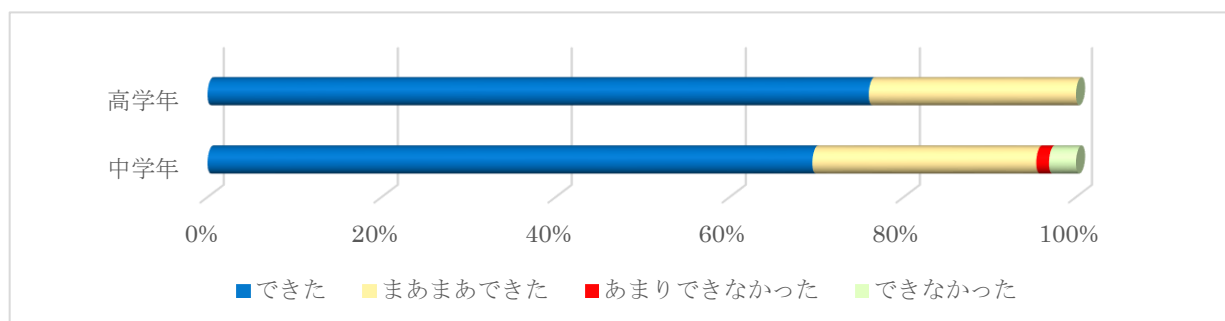
ハロウィンやクリスマスなどの文化について知る機会につながっていると思う。初めて知る文化に驚いたり、興味深く思うような反応をしている児童がいる。きっかけとしては成り立っていると思われる。

- ・その他、第1学年からの英会話学習の実施に期待すること等。

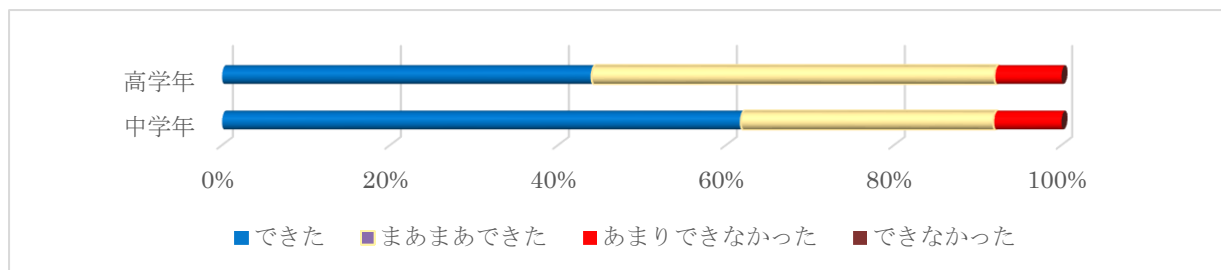
耳から覚える力があるうちに生きた英語を学習することはとても意義がある。外国語への苦手意識がないことが大前提。英語に対する抵抗感をなくし、楽しく活動しながら、英語での会話が自然にできることを期待している。可能なら月1回ではなく、もっと多くの英語に触れる機会を増やしてほしい。また他の授業でもALTやEAAとの連携を強めていきたい。

(4) 学校関係者による評価

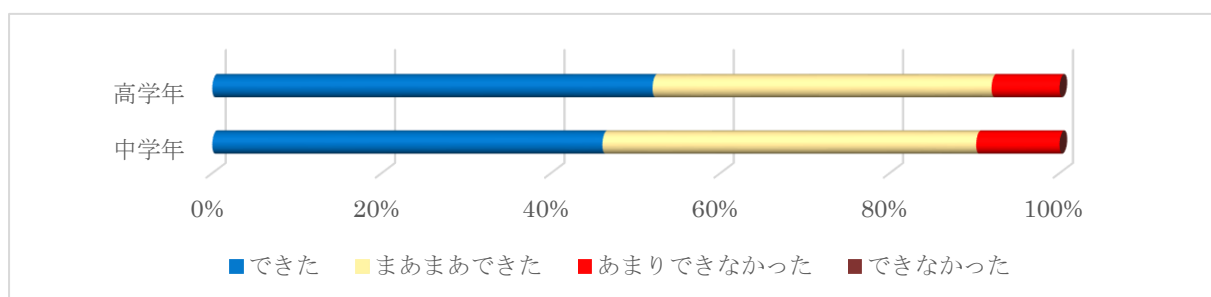
- ・ALTやEAAとの学習についての意識。(英会話学習について、ALTやEAAとの学習を楽しいと評価している児童。)



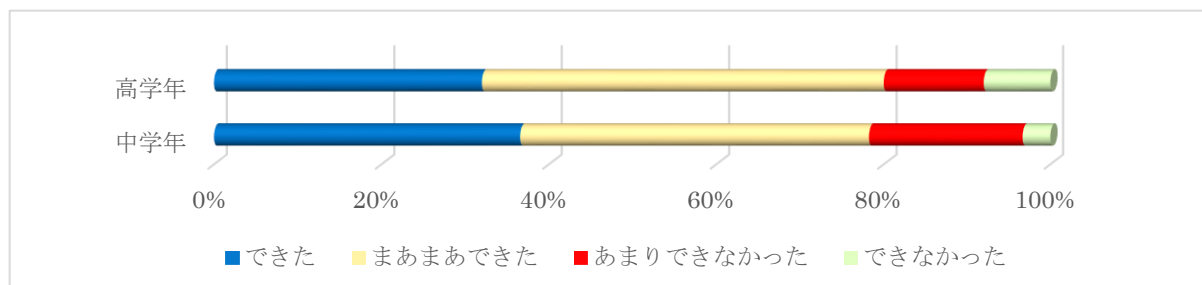
- ・ ALTやEAAとの活動内容についての意識。(英会話学習について、その時間で学んだことをALTやEAA相手に活用できたと評価している児童。)



- ・ 英語によるコミュニケーション能力の自己評価。(英会話学習について、学んだことを生かして、友達と簡単な会話ができたと評価している児童。)



- ・ 英会話学習について将来の有用性への意識。(英会話学習について、学んだことを学校の外で活用できた(活用できる)。)



- ・ 自由記述では、中学年までは英語で会話することの楽しさや新しいことを知るうれしさなどの記述が多い。高学年では英語チャレンジDAYに言及する児童が多かった。

4. 実施の効果及び課題

児童による評価、問1・問2では共に90%を超える割合の児童が英会話学習の授業に楽しんで取り組んでいるという結果が得られた。この結果から、英語に対する興味・関心はどの学年も高く、EAAやALTとの授業に前向きな姿勢で授業に取り組んでいるといえる。これは毎年同じような傾向が見られる。

問3・問4のコミュニケーション能力の自己評価・将来の有用性への意識では70%以上の児童がほぼ達成しているという結果だった。割合としては、問1、問2の結果に比べやや低い結果になった。しかし、前年度高学年において半数を下回った「学んだこ

どを学校の外で活用できた（活用できる）。』と評価した児童が75%を上回ったことは大きい。

他学年や他校との交流、また英語チャレンジ DAY などの英語の授業を通して、自分の英語力が身につけていることを実感できる児童が少しずつ増えてきている。

単元ごとのゴールを明確にし、授業で学んだことを発表したり、生かしたりできるような場面を意図的に設定することで、英語を学ぶことの楽しさや有用性を見いだせるような授業づくりをこれからも意識していく必要がある。

5. 課題の改善のための取組の方向性

取組みの方向性として、今年度①～③の三点を継続して取り組んでいく。

①ゴールを意識した授業作り

単元ごとのゴールを明確に提示し、なぜ英語を学ぶのか、目的をもって学ばせることで、有用性への実感につながっていくのではないかと考える。

前年度に続き、ICT を活用した他校との交流、他学年との交流、英語チャレンジ DAY など、必然性のある目的・場面・状況を意図的に設定し、積極的に活用していくことで、児童の達成感や自信につながると考える。

②Teacher's Talk の活用

授業の内容に関連付け、授業の導入時には EAA や ALT と担任との Teacher's Talk を実践し、英会話のモデルを示すことで、児童の興味・関心が高まると考える。

また、教師と児童、児童同士の会話の場面を意図的に取り入れ、会話を繰り返すことで、表現の定着につながると考える。

③他教科や行事等と関連付けた授業や他校との連携を意識した授業の実践

児童の実態や興味・関心を把握し、他教科や行事等と関連付けた授業や他校との連携を意識した授業を実践していくことで、英語の必要性を実感し、コミュニケーションの手段の1つとして活用していく力を養っていけると考える。